

旧金木町の地名

旧金木町は、梵珠山地の尾根をなす大倉岳から、南の源八森間の西側岩木川までの地域に立地しています。梵珠山地を源とする主な河川には、北から順に川倉の新川、金木川、高橋沢、小田川があり、ダムや溜池が設けられています。梵珠山地からは、西へ向かつて山地、丘陵、台地と変わっていき、その先は低い平野となっています。これら地形のうち、台地に立地する集落は金木、川倉、嘉瀬、中柏木、喜良市で蒔田、神原は金木川、岩木川の自然堤防に立地しています。

平成の大合併で金木町は五所川原市に合併し、大字はなくなりましたが、かつての大字名である金木、川倉、蒔田、神原、嘉瀬、中柏木、喜良市はこれまでもどおり使われており、これから記述する地名は旧大字名によるものです。

第一節 金木地区の地名

昭和三〇年（一九五五）成立した金木町の成立経過をたどってみます。

明治九年（一八七六）、村落の統廃合により、金木町にあたる地域は、毘沙門村、長富村、中柏木村、嘉瀬村、喜良市村、金木村、

川倉村、蒔田村、神原村、藤枝村からなっていました。

明治三二年（一八八九）市町村制施行により、中柏木・嘉瀬・毘沙門・長富の四カ村が合併して嘉瀬村となり、喜良市村は単独の村となりました。金木村、川倉村、蒔田村、神原村、藤枝村の五カ村が合併して金木村となり、大正九年に町制施行しています。金木町にあたる地域は嘉瀬村、金木村、喜良市村からなっていました。

昭和三〇年、昭和の大合併のとき、喜良市村、嘉瀬村は金木町へ合併しましたが、毘沙門は昭和三〇年三月一日、長富は昭和三十一年八月一〇日、五所川原市に編入しています。

昭和三十一年、合併した金木町は、すでに大字になっている五大字の金木・川倉・蒔田・神原・藤枝に三大字の嘉瀬・中柏木・喜良市を加え、八大字で構成されました。

金木（かなぎ）

金木の開村については、金木八幡宮初代神官となった笹木兵庫高祐が江州（滋賀県）から大永年間（一五二一～二七）、津軽へ来て金木付近を開発し、社司に就かれたことに始まります。笹木社司は天正一〇年（一五八二）一〇月病死しています（『金木郷土史』一九四〇）。また、金木館に居住した対馬家の先祖は、天正一六年津軽為信による飯詰城攻めの際、先陣を押し武功がありました。また、金木の開発にも従事しました。三代目は金木開発の功があり、寛永六年（一六二九）三一石の知行を与えられている（『青森県史 中世

編2』と見えることから、金木は天正年間（一五七三～九一）の開村になるものと思われます。

金木の名称は、天文年間（一五三二～五四）、浪岡北畠氏が作成したと伝えられる津軽の村名帳「津軽郡中名字」^{つがるくちゅうななざ}にはまだあらわれていません。

金木村は正保二年（一六四五）の「津軽郡之絵図」に初めて見え、同年の「郷帳」では一八六石余となっています。当時の開拓者はそれぞれの生活範囲の土地を基盤として、小知行^{こちぎょう}による土地を開拓していったものと思われます。

貞享四年（一六八七）、村落の分合にあわせて遣が組に改められ、下ノ切遣は飯詰組と金木組に分けられました。金木組は下岩崎以北小泊までの二四カ村が属することになり、金木村に初めて代官所が設置されました。以後、金木村は金木組・金木新田の中心となり、新田開発の進展にあわせて発展してきました。

金木村で小知行主体の開発が進んだ貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には一九五九石余とあり、天保五年（一八三四）の「郷帳」には一六二〇石余とあります。明治二年（一八六九）の「郷帳」では二二七五石余に増えています。

金木の東は喜良市、西は蒔田と接し、北は藤枝・川倉と、南は嘉瀬と接しています。

金木にはかつて次の四つの支村が存在していました。

ソデ柳村は金木発祥の地ともいわれ、喜良市村との間にあったとされています。貞享元年（一六八四）三月、金木村の庄屋儀兵衛が藩に提出した書上帳、絵図面に「そうぜん宮」（三間・四間）が記

されていますが、当時はすでに廃村になっており、民家はなく惣染^{そうぜん}堂（馬頭観音、農耕神を祭っています）だけとなっていたといえます。正保以前に村落があったと考えられます。

ソデ柳とは惣染柳のなまりではないかと言われています。この惣染堂は山道町にある保食神社に合祭されましたが、大正八年（一九一九）金木芦野競馬場建設と同時に守護神として遷宮、競馬場廃止になるとまた保食神社に合祭されました。

居升村^{いすず}は「天和書上帳添図」では金木川左岸、今の菅原^{すがわら}、浮洲^{うきす}（菅原、浮洲とも「青森県字小名調」^{あおもりけんあざこなしらべ}）に出てくる金木の字名です）あたりに所在する村でした。成立年代は不詳ですが、元禄六年（一六九三）任命の御蔵外取^{おくらますとり}一人のうちに「居升村惣左衛門」と「御国日記」に見えます。「金木新田之図」（元禄年間と考えられます）にも金木村のすぐ西、金木川左岸に居升村が描かれています。この後村名が見えなくなることから、金木新田開発以後（開発は元禄一年から着手しています）に、数回にわたる金木川の土石流で住民が他へ移住し、廃村になったものと考えられています。村には不動宮が鎮座していて、産土神^{うぶすながみ}として毎年旧三月二八日にお参りしていたと伝えられています。

不動林村には、次のような伝承が残されています。菅原、浮洲にあった居升村が数回の大きな土石流（山津波）で全戸が押し流された際、不動宮も流されました。居升村の住民が金木川下流の雑木が繁茂するところに、不動宮が流れ着いているのを見つけ、ここを永住の地と定め、お宮を建立し、不動宮の名をとり村名を不動林村にしました。

不動林村の成立年代は不詳ですが、「天和書上帳添図」に記載されている村です。元禄年間のものと思われる「金木新田之図」にも村名が見えます。村は以後明治まで存続します。現在の沢部にあたります。

妻ノ^{さいのかみ}神村は延宝四年（一六七六）取立ての漆新田村で、家数は四軒でした。後の元禄年間（一六八八―一七〇三）のものと考えられている「金木新田之図」には見えないので、すぐ廃村になったものと考えられています。

妻ノ神村を流れる妻ノ神川は藤枝溜池に注ぎ、水門から出た流れは水田を潤しました。

金木という名称の語源には次のような諸説があります。

①「金木山の奥に金山があり（現在も大判沢・小判沢の地名がある）、これに起因して当時の部落を金木と称えるようになった」（『金木郷土史』）。

②「弘治年間（一五五五―五七）金城と称する城があり、この城主は浪岡北畠氏の幕僚で金木弾正忠といったと伝えられ、金木という地名はこれに由来したもの」（『金木郷土史』一九四〇）。

③「大倉岳、袴腰岳に源をもつ金木川は、喜良市の北で流れを西に変えている。金木川のもとには「曲川」ではないか。その曲川に沿った所に「柵」があったので「曲柵」といい、のちに金木となったという」（『ふるさとのかたりべ 第九集』）。

④「三代藩主信義の頃、金木に産出するひば材が新田開発の大きな財源となり、「金の木」だと言われことから、金木と呼ばれるようになった」（『金木のかたりべ 第一六集』）。などがあり、定説はあ

りません。

明治一七年（一八八四）の「青森県字小名調」によると、金木の字名には、浮洲、玉水、沢部、菅原、朝日山、芦野の六つがあり、このうち芦野、浮洲は人家はありません。これらの字名は現在も変わりありません。

これら字名のうち一番面積が広いのは芦野で、金木駅から北西方向の東側はすべて芦野で、とくに台地部分は原野でそこには蘆（芦・別名よし）が一面に生えていました。このことから芦野という地名になったと思われます。ただ、実際に生えていたのは芦と外見が似ているすすき（別名かや）と考えられます。芦野に含まれる通称町名には芦野公園のある見崎町、若松町、神明町（神明宮に由来する町名です）や山道町、朝日町、美晴町、昭和町、新しくできた芦野団地、旭ヶ丘団地、大東ヶ丘があります。

この字名芦野のうち通称若松

町には、伊藤忠吉記念図書館、五所川原警察署金木分庁舎、自然休養村管理センター、児童動物園、金木歴史民俗資料館、金木小学校があり、芦野団地には金木中学校、金木高等学校、通称朝日町には津軽森林管理署金木支署があります。また、山道町には町内面積の約半分を占める弘前大学農学生命科学部付属



図134 芦野原野に立地する弘前大学農場

金木農場があり、芦野には官公署のほか教育施設があります。

字名の朝日山は縁起のよい地名で、早く朝日を迎える地ということからつけられたと言われています（『ふるさとのかたりべ 第九集』）。朝日山は街の中心部をなしています。金木総合支所、商工会、金木郵便局など公共施設があるところは通称町名北新町といっています。青森銀行、みちのく銀行、県信用組合などの金融機関のほか三味線会館、物産館マディニー、太宰治の生家斜陽館など観光施設や寺社が所在するところは通称町名本町といい、ほかに寺町、小川町があります。朝日山に含まれる通称町名には、ほかに南新町、田町、浦町、芦野町、新富町、米町、川端町があります。

沢部は金木川の右岸自然堤防に開けた集落で、三軒町、上・下沢部の通称三町名があり、上沢部町には元禄時代にあつた不動林村が含まれています。また、近年南東の水田地帯にショッピングセンターができています。

字名の玉水、菅原、浮洲は金木川の左岸自然堤防およびその後背低地に立地している地域で、金木川朝日橋の南側国道三三九号のほぼ東側が玉水、西側が菅原となっています。浮洲はもう少し下流で、人家はなく、このあたりに、かつて存在した居升村の名残ともいえる居升橋（地図では井マス橋となっています）があり、浮洲はその西側一帯です。字玉水と菅原を合わせた町名が通称栄町です。栄町（菅原）には金木公民館、つがる西北五広域連合かなぎ病院、金木消防署、金木自動車学校があります。

金木で使われている通称町名に、上町・上金木と下町・下金木があります。これらの通称町名は、町制記念『金木』（大正九年金木

町役場刊）中の「金木案内俯瞰絵図」にも示されています。また、大正五年刊『金木しるべ』の「金木村略図」にも本町、寺町、新富町、下町、横町が図示され、大正時代には使われていたことが分かります。

上町・上金木は台地をなす区域で、神明町・朝日町・山道町・寺町・北新町・南新町・浦町・新富町などの総称です。このうち寺町・新富町と本町の坂の上付近までを上町と言っています。

下町・下金木は金木川に沿った低地で、通称小川町・田町・栄町・川端町・米町・三軒町・沢部などの総称です。このうち、小川町・田町は通称下町と言っています。

金木の通称町名の一つに「大東ヶ丘」があります。開拓集落の「大東ヶ丘」で、金木駅北東方向四・二kmにある高長根（標高約一六三m）の南西麓に広がる丘陵地にあります。この地に終戦後の昭和二年（一九四六）満州や樺太からの引揚者等五五世帯が入植しました。昭和二年四月、入植者は「引揚者帰農開拓」、「食料増産隊」、「川倉二、三男分家型開拓団、一部引揚者」ごとに、東から上町、中町、下町と定めた三つのブロックに分かれて入植しました。翌年、大橋忠雄開拓団団長（金木町長）は三ブロックを合併し、「大東ヶ丘芦野開拓団」と名称変更し、一面草や木で覆われた原野の木を切り倒し、荒地に鋤を打ち込み、血のにじむような苦労を続けて開墾していきました。昭和三年（一九四八）には電灯が灯り、昭和二四年金木小学校大東ヶ丘分校が開校（生徒数五五名、高・低学年の複式）、昭和二六年秋、開拓団住宅建設が完了し、五五戸の集落となります。

昭和二七年にようやく一般野菜作付け、飼料用デントコーン作付けが行われ、乳牛飼育による酪農が始まりました。また、葉煙草耕作も行われています。入植から住宅ができるまでの数年間の苦労がありました（『金木のかたりべ第一七集』）。

開拓以来七〇年経ちますが、この間高度経済成長の波に乗って地区を離れた人も多く、世帯数も当時の半分以上となっています。現在、離農者もあり世代交代もしていますが、営農は受け継がれています。「大東ヶ丘」の地名由来は、隣接する五所川原農林高等学校の実習農園「大東農園」からきているといわれています。

金木には次の神社があります。

金木八幡宮 金木町朝日山一五四（寺町）

延宝八年（一六八〇）の調査では開基年号不詳です。慶安二年（一六四九）再興となっています。安政二年（一八五五）の「神社微細帳」によると、建立年代不詳です。また、「大永年間（一五二一～二七）浪岡城主北畠具永が再建し、天正年間に津輕藩になっても歴代の藩主御巡国の折には御直拝され、かつ御紋付の幕、燈籠等奉納された由緒正しい神社である」（八幡宮由緒書）と記されています。なお、神社の表裏に鳥居があるのは他に例がないことであるといえます。

八幡宮の祭神はほんたけのみこと菅田別命、天照大神、素盞鳴命、軻遇突智命、倉稻魂命です。境内社に天満宮と五穀神宮があります。

金木神明宮 金木町朝日山（神明町）

宝永元年の「社堂境内記」には延宝元年建立とあります。安政二

年（一八五五）の「神社微細帳」には建立年月不詳となっています。万治二年（一六五九）再建となっています。

金木愛宕神社あたご 金木町朝日山（小川町）

建立年月不詳です。延宝八年（一六八〇）再建とあります。

惣染堂・稲荷宮 合社 保食神社 金木町芦野（山道町）

建立年月不詳です。明暦二年（一六五六）再建となっています。惣染堂は馬頭観音を祭っていますが、神社は稲荷神を主体に敬っています。

不動林不動宮 金木町沢部（不動林）

建立年月不詳です。居升村の産土神として創建されました。同村廃村後、延宝七年（一六七九）現在地に建立しています。祭神は不動尊です。不動宮末社に稲荷宮、愛宕宮、惣染堂があります。

稲荷神社 金木町芦野（通称若松町）

山ノ神 金木町芦野（通称山道町）

金木に所在する寺院は次のとおりで、すべて金木町朝日山（寺町）にあります。

金木山雲祥寺 金木町朝日山四三三

曹洞宗通幻派 長勝寺末寺 本尊は釈迦牟尼仏です。

縁起によると、慶長元年（一五九六）、繁翁茂の開基とされていますが、正保二年（一六四五）創立としているものもあります（『津輕史事典』）。寛文七年（一六六七）長勝寺一四世聖眼雲祝和尚を勧請開山としました。文化八年（一八一二）雲祥寺一五世愚全和尚が中興といわれています。寺宝は十王曼陀羅（七軸の地獄の絵

図)です。

金龍山南台寺 金木町朝日山一八三

真宗大谷派 東本願寺末寺 本尊は阿弥陀如来です。

縁起によると、開創休西坊は摂津国東成郡生玉庄中村の住人で、俗名を生玉角兵衛といい、教如上人の法弟です。文禄二年(一五九三)、金木村に錫杖(僧侶・修験者の持ち歩く杖です。頭部に大きな円環があり、それに数個の小さな環がついていて、振ると鳴ります)を留め草庵を創建しました。これについては元禄三年(一六九〇)創立とするものもあります(『津軽史事典』)。宝永元年(一七〇四)玄貞の代に寺院を拡張し、翌二年本山より寺号を許され、金龍山南台寺と号しています。

青蓮山妙乗寺 金木町朝日山四二五

日蓮宗 法立寺末寺 本尊は十界曼荼羅です。

縁起によると、宝永五年(一七〇八)僧日良が金木新田、川内村(現中泊町)に庵を結び、妙乗庵と称しました。正徳四年(一七一四)八月荒関利右衛門の帰依と渴望により、金木に移転しました。享保一二年(一七二七)弘前法立寺末寺となり青蓮山妙乗寺と号しました(『金木郷土史』)。

朝日山照蓮院 金木町朝日山二五九

浄土宗名越派 貞昌寺末寺 本尊は阿弥陀如来です。

縁起によると、元禄七年(一六九四)七月一日教誓浄頓が金木村中の地藏堂跡地に庵を設け、念仏弘通(仏教の教えを広めること)の道場として開基したと言われています。

宝暦一三年(一七六三)正月一七日弘前貞昌寺の隠居照教和尚が、貞昌寺の末寺とし浄土宗名越派に属し、安永二年(一七七三)八月四日照蓮社として開創しました。明治初年に寺号が許され照蓮社を喜三山照蓮院とし、後に山号を朝日山と改称しています。

町名ではありませんが、芦野の西部に広大な面積を占める大東農園があります。所在地は金木町芦野三六三番の三です。

大東農園は昭和八年(一九三三)四月、金木町から三〇haの山林原野を借り入れ、五所川原農学校生徒のための実習農場として開園しました。農園はその後五所川原農学校の卒業生によって組織された財団法人大東農園勤学会のものととなり、農具舎、生徒宿舎、炊事場、講堂等が竣工、活用されました。経営は山林、畑作、牧草、稲作、肉牛等で成果を挙げました。

大東農園の大東の由来については、次のような伝承があります。慶応年間(一八六五～六七)金木村角田源八が沢水を引水し、広漠たる芦野原野を水田に開拓したいと藩に申し出、工事に取り組んだものの飢饉にあい休止しました。その後大工の山形藤右衛門(大藤とよばれました)は自力で大工事に挑み、今の神明町に二〇haの開墾が成就しただけで、資力不足により、やむなく廃止せざるを得ませんでした。名称大東の大は大藤の大を採り、東は旭輝く芦野の東部という意味でつけたといわれています(『五農八十年史』)。

学校教育で特筆されるのは明治高等小学校です。明治二六年(一八九三)の創立ですが、金木・嘉瀬・喜良市・武田四力村の組合立高等小学校で金木芦野公園の一部に設立されました。当時北津軽郡

には五所川原町に唯一北辰高等小学校があるだけで、北津軽郡北部での高等小学校設立が切望され、実現されました。閉校までの三三年間に七〇九名の卒業生を出し、卒業・終了生は学区地域の発展を担ったのはもとより、県内外でも活躍しました。現在の青森県立金木高等学校も昭和二十七年、金木町ほか五カ町村（中里町・嘉瀬村・内潟村・喜良市村・武田村）で学校組合を設立し、組合立金木高等学校としてスタートしています。この地域の教育にかけた熱い思いが伝わってきます。

芦野公園が中心になっている^{あしのちしやうぐん}芦野池沼群県立自然公園は昭和五〇年（一九七五）六月一七日に指定されました。五所川原市金木町・中泊町とつがる市車力にまたがる公園の総面積は一〇九一haです。この区域につくられている^{ふしんだためいけ}藤枝溜池（金木）・大沢内溜池（中泊）・牛潟池・袴形池（つがる市）などの^{かんがい}灌漑用溜池には湿原や水生の植物群落が生育し、季節ごとの景観を見せています。

桜の名所として知られる芦野公園は芦野湖（正式名称は藤枝溜池）を中心に二二〇〇本の桜、二〇〇本の梅、それに黒松が調和してすばらしい景観となっています。園内には児童動物園、歴史民俗資料館、太宰治文学碑、太宰治銅像や全長一二八mのつり橋桜松橋、芦野夢の浮橋などがあります。

城館としては、金木館があります。所在地は通称町名新富町の中心部西側あたりです。館主は天正年間（一五七三～九一）に対馬右衛門太郎がいたとする説や、それ以前に浪岡御所北畠氏の臣金木弾正忠がいたとする説があります（『青森県の中世城館』）。

城館のあるところは地形的には台地部となっていて、金木の中心市街地をなしています。台地の標高は金木駅付近で約一六mあり、西側に向かって低くなっています。金木館の所在地である新富町は、この台地の末端部にあり、標高は約一〇mです。約五mの落差で低地となっています。館の南側は金木川で、北東から北側は冷水^{ひやみず}という沢に面し、西側は古十三湖の名残といえる低湿地となっていて三方が天然の要害をなしていました。東側には濠を掘り土塁を築いていたようです。現在は市街地化のため改変され、遺構はほとんど確認できなくなっています。

金木の遺跡は台地部に多く存在し、そのうち発掘が行われた遺跡も数多くあります。主なものをいくつかあげますと、旧石器時代から縄文時代への移行期のものとして金木の相野山遺跡があります。縄文時代では草創期から前期・中期・後期・晩期を含む芦野（2）遺跡、前期・中期・後期の妻の神（1）遺跡、中期・後期のへび沢遺跡、後期の神明町遺跡などがあります。

川倉（かわくら）

川倉村の名は寛文四年（一六六四）の「郷帳」に初めて出てきます。川倉村領には三千石ほどの開発可能地があり、寛文一二年（一六七二）から二一〇人の小知行が開発に取り組みました。その中にこの地域の小知行開発として、唐笠柳村に居住し小知行高三〇石（寛文元年・一六六一）で諸手警固役を勤めていた毛内家初代・茂

右衛門がおり、同役七人（うち二人は途中配属異動となって五人となります）と協力して開発経費を負担し、川倉村領の川倉川と妻ノ神川を掘り通して洪水地帯川倉の排水工事を完成させました。毛内茂右衛門は川倉村開発の功績が認められ、貞享三年（一六八六）には新たに七〇石加増されています（『金木郷土史』）。

明治三二年（一八八九）、金木村と合併して川倉は大字名となりますが、大正九年（一九二〇）金木が町制施行した後も川倉は金木町の大字名として続いてきました。



図136 「川倉」の通称地名

明治一七年（一八八四）の「青森県字小名調」の字名には、宇田野、七夕野、林ノ下、米出、外沢、女坂がみられますが、現在はいずれも字名に大倉岳が加わっています。通称名として藤枝溜池北西岸一帯の湯の川、国道を横切る新川南一帯の向道、新川上流の川倉開拓があります。

川倉は東を大倉岳西方敷場沢の尾根に、西は藤枝の東側水田に、南は新川・藤枝溜池北岸に、北は中泊町大沢内に囲まれています。東部は山地・丘陵を占めそこから続く西方は台地（段丘）となつて

いて台地部分に川倉集落ができています。

川倉の名称は弘前藩三代藩主信義が、正保年間（一六四四～四七）に津軽統一までの戦没者供養と地元開拓事業に汗を流し亡くなっていった農民の供養のため、川倉観音の勧請（神のお出でを願う）に始まるとされています。藩主信義がつくったと伝えられている「水上はいずこなるらん川倉の耳に音とふ山びこの声」と詠まれた歌の中の「川倉」が集落の名前になったと伝えられています（『金木郷土史』）。川倉の倉は山の鞍部・尾根を意味しているのかもしれませんが。

この川倉観音堂は現在林下地区の三柱神社境内にあります。藩政時代には三柱神社の建っている所にありました。明治初年の神仏分離令で廃堂の憂き目にあいましたが、昭和に入ってからお堂

は三柱神社手前右横に再建されました。今は川倉芦野堂と呼ばれ、津軽三十三観音霊場十三番観音の札所となっています。

観音信仰とともに広く人々に信仰されてきたものに地藏信仰があります。地藏信仰の一つに死者供養があり、亡くなった身内の人、そのものの地藏尊を建てて冥福を祈ります。川倉賽の川原地蔵例大祭はその代表で旧六月二三日には供え物をして供養し、衣装を着せて顔を白く塗り上げ魂入れをし亡き人の供養と現世の幸せを祈ります。地藏堂の裏には巫女いたこの口寄せを聞く人々が大勢集まり、そこには熱心に聞いて手をあわせている姿があります。

地藏堂南の小道は賽の河原と呼ばれる石積み、石地藏が並ぶ霊場となっています。伝承によれば霊場賽の河原が開かれたのは、貞観の頃（八五九～七六）、慈覚大師によるとされています。中興は雲祥寺開基繁翁茂和尚で、慶長元年この地に地藏堂を再建しました。再中興は雲祥寺一五世あるいは一六世とされています。地藏堂にある慈覚大師自作の石像地藏尊は明治中頃まで祭られていました（『金木郷土史』）。

三柱神社 川倉林下

川倉の神社には三柱神社があります。川倉観音堂（川倉芦野堂）と同じ境内にあり、祭神は大山祇命、大山主命、水波女命で、祭礼は五月一二日です。初めて開かれたのは正保年間（一六四四～四七）ではないかと言われています。

御宮の覚書には「弥陀、薬師、観音」とあり、貞享元年（一六八四）川倉村庄屋茂左衛門の書上帳添図には「阿弥陀堂」とあり、ま

た貞享四年の「検地水帳」には「観音堂」と記されています。

安政二年の「神社微細書上帳」に三柱権現と改めて報告されています。明治四年に三柱神社と改められました。その後、色々な経緯を経て、明治九年（一八七六）には村社になりました。境内にある川倉芦野堂は津軽三十三観音の第一三番札所となっています。

川倉の神社には、ほかに新川を国道が横切る少し東側に川倉山ノ神社社があります。

通称名の一つである川倉開拓は、川倉の主要集落から東へ約3km、標高四〇～八〇mの丘陵地にあります。昭和二五年（一九五〇）一五戸が入植したのが始まりで、昭和四八年発行国土地理院五万分の一地形図・金木にも記載されています。菜種、大豆を主に栽培したほかに乳牛、養豚、養鶏など多角的農業経営を行い生活の安定をはかり、他開拓の模範とされました。開拓地に電灯が灯ったのは入植一〇年後の昭和三五年（一九六〇）のことでした。その後、昭和四〇頃から水田化が行われ、川倉開拓集落は昭和五〇年後半になくなりました（『金木だより 第五三号』）。

通称名の湯ノ川北の台地面（段丘面）が西側で坂となって田圃へ



図137 石積みと石地藏

出る手前に小池があり、その北側に湯ノ川ので湯といわれた直径三五cmほどの湧き壺がありました。かつては、生温かい湯が湧き出ていたということです。江戸時代の紀行家菅江真澄はここのお湯に入浴したばかりでなく、疥癬、ただれ目、きり疵などに効くとその効用まで記しており、当時はかなり利用者があつたと思われます。現在は冷泉を経て湧き壺は埋積し、近くにあつた溜池と小池も共になくなっています。

川倉の現在の主要産業は農業ですが、江戸時代の初期から村の北側で漆木栽培を行っています。貞享元年（一六八四）漆新田庄屋の勘右衛門の書上に四名が記され、漆木三三〇本とあります。その後も栽培は続けられ、江戸時代終わり頃の文久二年（一八六二）、川倉村中谷甚六が漆役に任命されています。

川倉を流れるおもな河川には新川と外ヶ沢があり、外ヶ沢は川倉山ノ神社北側で新川に合流しています。溜池は川倉集落の北西に小河川を集めて作ったトヤ溜池があります。

交通機関の一つとして、五所川原から津軽中里まで津軽鉄道が通っており、川倉集落の南西に川倉停留所が設置されています。

藤枝（ふじえだ）

藤枝溜池の西に広がる平野の中に、同溜池から西方約〇・六kmのところ南北約一・五km、幅約〇・一km、標高が約三mの直線状をしたやや高い土地があり、周辺の水田より約一m高くなっています

（十三湖干拓建設事業所等の資料）。この直線状をした周りより少し高い土地にできている集落が藤枝で、このような地形は藤枝北方の大沢内集落にも見られます。こうした地形は、縄文時代前期の頃、北部津軽平野に広がっていた広大な「古十三湖」の沿岸流によってできたと言われています。実際、藤枝集落西部の藤枝遺跡発掘調査（一九七八年）では地表下に丸みを帯びた粗砂や扁平な礫が堆積しており、沿岸洲を思わせます。

東は金木・川倉、西は中泊町豊島、神原、南は蒔田、北は中泊町大沢内と境しています。

藤枝は金木新田一八カ村の一つとして誕生した集落で、開村当時は岩木川沿いであり、「桜井村」と「芦部村」の二つの集落に分かれていました。元禄十一年（一六九八）と推定される「金木新田之図」には大川（岩木川）下流川沿いの田茂木村のさらに下流に芦部村と桜井村が描かれています。芦部村と桜井村は藤枝村の前身ですが、現在とは大きく異なる場所にありました。

正徳三年（一七一三）五月二三日、金木新田の年貢税率を定めており、この時芦部村と桜井村は山通りにありました。また、元文二年（一七三七）の『三新田村日記』には、現在と同じ位置に記載されているので、正徳三年（一七一三）以前に現在のところに移転してきたと考えられます。その理由はおそらく度重なる水害であったと思われる（『北奥文化第二九号』『金木新田について』）。

金木新田桜井村は享保十一年（一七二六）、村の産土神の馬頭観音を祭っている藤枝保食神社境内にあつた紫雲がたなびくような壮

麗巨大な「藤の木」に因^よんで「藤枝村」と改めましたが、それらの「藤の木」は現在老木三株があり、地元の人々によって作られた頑丈な棚によって保護されています。

保食神社（藤枝東田七八）は正徳二年（一七一二）の建立で、当初は「惣染堂^{そうぜんどう}」と称していました（『三新田村日記』）。

明治九年（一八七六）に「藤枝村」は「芦部村」と合併しましたが、合併後は戸数の多い「藤枝」を村名としました。その境界は現在も残っている「ブツケ堰」であったと言います。

元文元年（一七三六）の「検地水帳」によれば、開村当初の戸数は「桜井村」が四一戸、「芦部村」一七戸の計五八戸でした。それから一三三年後の明治二年（一八六九）の調査では、藤枝村三五戸、芦部村一五戸、計五〇戸で、その差は少なく戸数はあまり変わっていません。

明治二年（一八八九）、金木村と合併して藤枝は大字名となり、大正九年（一九二〇）金木が町制施行後も金木町の大字名として続いてきました。

明治一七年（一八八四）の『青森県字小名調』にみられる三春^{みはる}、東田^{とうた}の二つの字名は現在も使われています。



図138 夏でも見られる藤枝のカッチョ

寺院には浄土宗（名越派・十三山湊迎寺末庵）紫雲庵^{しうんあん}があります。本尊は阿弥陀如来で、享保一九年（一七三四）草創と言われています（『三新田村日記』）。創建当時は浄円庵と呼ばれていましたが、これは開基浄円の名を庵の名としたと思われます。後に惣染堂^{そうぜんどう}（現在の保食神社）の藤花に因んで紫雲庵に改められました。

冬季シベリアからの北西季節風による雪流れと吹雪を防ぐ「カッチョ」とよばれるみごとな防風雪柵は藤枝集落の冬の風物詩です。カッチョは昔はアシガヤか野ガヤを使っていたましたが、現在は高さ三・九m、幅一八〇二三cmのヒバの板囲いになっています。集落の高齢化が進みカッチョの組み立て・解体は労力の大きな負担となってきたため、冬季が過ぎてもカッチョは解体しないでそのままにしている家も多く、夏でもカッチョは見られます。

吹雪の最も吹き荒れる時期に、毎年カッチョの前で角巻きを着け、かんじきを履いて歩く「地吹雪体験ツアー」が年中行事となっています。

蒔田（まきた）

正保二年（一六四五）の「津軽郡之絵図」（『青森県地名大辞典』）に金木村から中里村へ通じる道から分かれて西方に「蒔田村」（蒔田村のことか）が見えます。同年の「郷帳」にも新田として「蒔田村」が出てきて村高一三石となっています。ところが貞享四年の「検地水帳」に村名がでてこないのです、一旦廃村になったと思われる

ます。ただし、「金木村天和書上帳添図」（『金木郷土史』）には不動林村の西に小さな集落が描かれ「右之内」と書かれていることから、天和当時は不動林村の一部として扱われていた可能性があります。

蒔田村は、金木新田一八カ村の一つ川口村として開拓されましたが、享保十一年（一七二六）川口村を蒔田村と改称しました（「村名改称并新村創立調」。元禄十一年（一六九八）と推定される「金木新田之図」（『北奥文化 第二九号』）に蒔田村の名が見え、また「弘前藩庁日記」宝永三年（一七〇六）十一月三日条に川口村、

神原村間の水除堤三間築き替えの記事があります。元文元年

（一七三六）の「検地水帳」には、独立村として載っています。

蒔田は金木川・岩木川の自然堤防上に立地しており、東は金木・不動林、西は神原、北は藤枝・中泊町豊島、南は金木川と接しています。

蒔田は今、岩木川から少し離れていますが、大正二年製五万分の一地形図を見ると、岩木川

はつがる市稲垣町家調から東に大きく蛇行して蒔田を通り、蒔田から西へ流れてから神田橋へ向かっていたのです。

藩政時代には、岩木川を行き来する材木は、すべて「川口材木御



図139 蒔田を流れていた岩木川（大正二年）

改所」で極印を受けなければ販売できない制度であったので、川舟がいつも三〇〜四〇艘も停泊していた川港でした。

蒔田村の金刀比羅宮は岩木川水運が盛んであった頃、舟路の安全を願って、讃岐の金毘羅宮本山から分身勧請したものといわれています。勧請年月は分かりませんが、天明二年（一七八二）、近衛家が津軽藩のために内侍所で五穀豊穡のご祈禱をした御守札二七通を下賜されたもののうち一通を、この御宮へ奉納されているので、天明以前に勧請されたものと思われます。

昭和に入ると岩木川の改修や川が浅くなり、船場は神原へ移っていきます。この間、舟運で扱われた品は木材、米はもちろん木炭、薪など生活用品、ときには工事用砂利・砂、レールも運んだと言います。しかし、盛んであった岩木川舟運も戦前には衰退してしまいました。



図140 「神原・蒔田」の通称地名

蒔田の字名には桑元^{くわもと}、酒井^{さかい}、初瀬^{はつせ}、米崎^{よねざき}があります。これらの由来については、次のように説く人もいます。すなわち桑元は「崩れるところ」、酒井は「境」、初瀬は「浅瀬のはじまるところ」、米崎は「砂地の崎」ではないかと言います（『金木のかたりべ 第六集』）。

神原（かんばら）

「神原の渡^{わた}、蒔田の船場」として知られた神原は、元禄十一年（二六九八）に開発された「金木新田之図」にあらわれていますので、このころ村は成立していたと思われます。

享保一四年（一七二九）の「梅田村彦六家記^{うめたむらひくろくかき}」（『本藩旧記』）には「蒲原^{かんばら}」とふりがなが付けられているので、蒲原と書くのが正しいと思われます。

当時、地元の方言で蒲原をガヅギ原と言っていました。ガヅギとは水草のマコモのことです。や深いところに生育し、マコモの原であったでしょう。しかし、蒲^{がま}は単子葉植物のガマのことで、マコモより浅い水中・湿地に見られます。堤防が整備されていない当時は自然堤防の近くに広がる低湿地や池沼にマコモ、ガマが生育していたと思われますが、堤防の整備と並行して排水が行われ、次第に低湿地や池沼は埋積されていき神原にはガマが広く生えていたことから蒲原と名付けたと考えられます。それが神原となったのは検地の際の何らかの事情によるものではないかと言われています。

『平山日記』享保一四年（一七二九）三月十二・十三日条に「之野大雨二而下在洪水、蒲原村に而家拾貳軒流、人馬多死、所々堤崩み申候」とあり、大被害を受けています。

神原の地名由来として、「神が授けた原野である」とか、よく水害があるので「被^かる原^{はら}」涵原^{かんばら}（水につかる原）から神原になったという説もあります（『金木のかたりべ 第一六集』）。

神原は東は蒔田、西及び南は家調・繁田（つがる市稲垣町）と岩木川を隔てて接し、北は豊島（中泊町中里）と境しています。

神原の渡場は元文元年の「検地水帳」に「小屋六間・四間二四歩（七九・二^m）渡し守一ヶ所」と渡守小屋があると書かれており、岩木川右岸の現神田橋のたもとにありました。

嘉永五年（一八五二）、幕末の志士吉田松陰^{みやべていざう}と宮部鼎蔵^{みやべていざう}は五所川原市田川から舟で川向のつがる市木造芦屋へ渡り、堤防を旧稲垣村繁田まで歩き、繁田から舟で神原の渡場へあがって神原で昼食をとる、その後舟で芦野の渡場に着き歩いて中里へ向かっています。このように藩政時代から利用され、有名であった神原の渡場も明治四一年（一九〇八）一〇月、神田橋（初代）竣工とともに廃止になりました。このときの神田橋は長さ一八九m、幅三・六mでした。次の二代目橋は昭和一〇年（一九三五）三月、当時として津軽唯一の鉄筋コンクリート橋（長さ三六二m、幅四・五m）に架け替えられました。その位置は現在の橋より三七五m上流にできていました。現在の橋は三代目の神田橋で、明治四一年一〇月竣工した初代の位置に返ったわけです。現神田橋の七五m上流には、「史跡神原之渡

し」の標柱があり、その側面には「史跡十三館岡街道吉田松陰ゆかり之地」と刻まれています。

明治一七年の「青森県字小名調」によれば、神原の字名に桜元、小泉、種元たねもとが見られます。これら字名の由来には次のような説があります。桜元の桜は「作ら」であり大がかりな開墾事業によって切り開かれた土地、小泉は「出水」の転訛でイズミになり、泉が湧いていた場所、種元は「もと種」を耕作したところで水田として優れていた場所であるといえます（『ふるさとのかたりべ 第九集』）。

神原には稲荷神社があり、主神は宇迦之御魂神で食物、養蚕等農業の神ですが、現在では商家が家業の神として祭っているようです。稲荷神社隣の保食神社は馬頭観音を祭っています。



図141 神原の渡し跡に建立されている碑
(後方は三代目の神田橋)

第二節 嘉瀬地区の地名

嘉瀬の立地する地域は、津軽平野東部に面して北から南に伸びる金木台地が集落の北側で金木川や小田川に、南側は一ノ沢やウド沢に侵食され東西に細長い長方形をした標高一〇～一五mの地形です。この嘉瀬をつくった台地の北側と南側は浸食を受けて凹凸に富んでおり、古十三湖の名残のあった平安時代あたりまでは、これらの凸部分は崎をなしていたと考えられます。嘉瀬に端山崎、小栗崎など、崎のつく地名・字名が多いのはこうした地形からきていると思われます。

現在の嘉瀬という名称は、古くは別の漢字が当てられていました。正保二年（一六四五）の「津軽郡之絵図」に嘉瀬、正保二年の「郷帳」には嘉清村五五石余とあり、寛文四年（一六四五）の「郷帳」では嘉勢村、「天和三年御代官所村家人数之帳」で初めて今の嘉瀬の名がでてきますが、江戸時代を通じて嘉勢が使われることが多かったようです。このころ中嘉瀬村という村ができましたが、貞享四年（一六八七）に中嘉瀬村は小栗崎村と村名を改称します。嘉瀬村は天保五年（一八三四）の「郷帳」には嘉勢村一四八三石余、明治二年（一八六九）の「郷帳」に嘉瀬村一七八六石余とでてきて以後嘉瀬の名が使われます。

明治七年の「青森縣管内村名簿」に、嘉瀬村に並んで小栗崎村こぐりさきが記載されていますが、この小栗崎村は明治九年嘉瀬村と合併しています。明治二年の市町村制施行により、中柏木・嘉瀬・毘沙門・

長富の四カ村が合併し、嘉瀬村となった際、村名の由来は「大部落ナルニ因ル」（『五所川原綜合沿革史』）とあり、四カ村の中で大村の嘉瀬の名を採っています。その後、毘沙門、長富はそれぞれ昭和三〇年、昭和三十一年に五所川原市に編入となりました。昭和の大合併で嘉瀬村は金木町へ合併し、平成の大合併で五所川原市となりました。

嘉瀬（かせ）

小栗崎村は現在の嘉瀬集落の北側を占めていました。貞享元年（一六八四）の「郷帳」には寛文四年（一六六四）以後の新田で村高は九〇石余、貞享四年の「検地水帳」に三四八石余とでてきますし、村の産土神を祭る稻荷宮が宝永元年（一七〇四）の「社堂境内記」に延宝七年建立と見えますので、村の成立はわりあい早かったことが分かります。

字名には端山崎、はぎもと（萩元）、ひばり野（雲雀野）があります。そのうちの萩元は現在の国道三三九号の西側を占める区域です。

小栗崎^{こぐりさき}の地名由来については、突出している平坦な崎には栗の木が林立繁茂して、秋には小粒の栗の実が鈴なりに実り、先住民はこの自然の恵みを楽しんでいました。小さい栗のある崎ということから自然に小栗崎と呼ぶようになったといえます。その後、栗の害虫である「栗玉蜂」が発生し、葉に「虫瘤」^{むしうぶ}（巢）をつくって養分を

吸い栗の木が自然に枯れて全滅したという説があります（『ふるさとのかたりべ 第五集』）。

嘉瀬の東方は梵珠山地で青森市奥内と境し、北は喜良市・金木と南は中柏木・飯詰と接し、西方は旧十川を介して鶴ヶ岡・藻川と境しています。

嘉瀬の語源にはいろいろな説があり、それらを挙げてみます（『ふるさとのかたりべ 第三集』）。

中世の末頃存在したとされる嘉瀬城の城主嘉瀬光明宗範の名字をとって地名としたとする説です。

「嘉瀬」は藩政時代の文書に嘉清、嘉勢、加勢の名が記されていますが、呼称されている「カセ」にはそれ以前から開けた邑^{むら}が広い丘に存在していました。アイヌ語でカは丘、ブは広くという意味でカ・ブがなまって「カセ」になったらしいということです。すなわち、「カセ」とはアイヌ語で「丘が広い」という意味で、「カセ」の発音を後年文字で記録する頃から漢字に当てはめたものであるとするアイヌ語語源説です。

時の地頭、村長^{むらおかし}、豪族によって名づけられたものでなく、自分たちの祖先が自然の恵みに富み、清き水の得られるところ（嘉は住む所、瀬は川水が浅く流れが急の意です）に感謝して「カセ」と言い習わし、伝承されてきたとする集落所在の位置とその生活環境から出てきたとする説です。

嘉瀬の字名には、雲雀野^{ひばりの}、端山崎^{はぎもと}、萩元^{はぎもと}、駒留^{こまどめ}、東嘉瀬山、西嘉瀬山があります。これら字名には次のような意味があるといえます。

雲雀野の雲雀は日当たりの良い畑や河原にすむ小鳥、野は草刈り場で、雲雀野は広々とした住みやすい所です。端山崎は丘の端が崎になつていた所です。萩元のハギは萩ではなく「剥ぎ」で、萩元は開墾のために土を「剥ぎとった場所」です。駒留のコマは馬、放牧地で「馬を留めた所」が駒留であると言います（『ふるさとのかたりべ 第九集』）。

嘉瀬には古くから言い伝えられている狐崎きつねざきという地名があります。場所は清久溜池と二ノ沢溜池との間、国道三三九号の西側へ三〇〇mほど突き出た崎を狐崎と言っています（通称町名は新堤町）。ここには磯崎宮通称薬師様を祭る神社があります。この崎は嘉瀬周辺

に湖水が広がっていたころ漁の拠点であったこと、開田作業小屋を建てるなど嘉瀬地区の新田開発の拠点であったことなどで、嘉瀬にとっては重要な役割を果たした所であると言われています。なお、言い伝えによると、かつてここは狐の群れが生息しており、狐に漁をした魚や通行人の手土産を奪われることもあり、この場所を狐崎と名づけたと



図142 雲雀野（上古町）に残る萱葺き

います。

津軽鉄道嘉瀬駅の東方約七〇〇mの所に、五万分の一地形図で立山と記載されている標高約五〇mの丘があり、地元では憩いと信仰の場となっていて、嘉瀬観音山と呼び親しまれています。観音山の東側に昭和六年（一九三一）スキー場が造られ、北郡大会や県下スキー大会が開かれました。戦後、スキー場も改築され、クロスカントリイコースも造成しました。一九九四年リレハンメル、一九九九年長野の冬季オリンピックに連続出場した古川純一選手もこのスキー場で練習を積み日本を代表する選手に飛躍しました。

また、嘉瀬観音山には嘉瀬三十三観音巡りの道が開かれ、建立者三〇二名によって昭和八年（一九三三）三十三観音像が建立されました。三十三観音を巡るお参りの人が多く見られます。

寺社には浄土宗妙光庵、浄土真宗明誓庵、嘉瀬八幡宮、嘉瀬稲荷神社、嘉瀬磯崎神社、嘉瀬保食神社があります。

妙光庵 嘉瀬雲雀野二三一
縁起不詳です。

「享和三年寺社領分限帳」（国立国文学研究所資料館蔵）に延宝六年（一六七八）八月創建として、嘉瀬村庵（浄土宗）の名が見えているので、この頃開かれたと思われます。

妙光庵には、寺宝となっている「御曼荼羅地獄絵図」があります。この絵図は、この世とあの世の境、三途の川を渡った亡者を閻魔大王が審判し罰するため浄破離鏡（透明な水晶・地獄で閻魔が生前の行いを映し出すという鏡です）の前で目方にかけている図で、現世

での人間の罪が如何に重いかを表しており、それぞれの罪の重さによつて地獄の責め苦が負わされるといいます（『ふるさとのかたりべ 第四集』）。

明誓庵 嘉瀬雲雀野三二八

縁起不詳です。

創立者は不明ですが、伝承によれば能登の国止院の在、山中村から来た次郎（後に万衛と改名しています）の子で大工の長松（後に利五衛門と改名しています）と利吉兄弟が協力して現在地に庵を結びました。その後に、兄弟は京都方面へ働きに出かけましたが、「その節に親鸞上人ならびに蓮如上人御真筆の御掛軸各一本宛持参した」（『金木郷土史』）と言われています。帰郷してから兄弟のうちどちらかが庵主になったと思われます。

嘉瀬八幡宮 嘉瀬萩元一八八

嘉瀬八幡宮の開基の年月は不詳ですが、恐らく嘉瀬草創の時創建され、元龜三年（一五七二）再建（『金木郷土史』）、あるいは延宝四年（一六七六）再興（『延宝八年堂社帳』）と伝わっています。また、「神社微細書上帳」（『五所川原市史 史料編2 下巻』）に建立年月不詳で、寛文二年（一六六二）再建と見えます。祭神は誉田別命ほんだわけのみことで、本殿、拝殿、神楽殿があり、境内に神明宮（祭神・天照大神）、稻荷神社（祭神・倉稻魂命うかたまのみこと）、人丸神社（祭神・柿本人丸）の三社が祭られ、氏子が二三一戸となっています。

昭和五年（一九八〇）八月一日拝殿付近から出火し、折からの風にあおられ全焼しました。本殿から御神体は運び出されました

が、再興棟札など貴重な資料を失いました。

嘉瀬稻荷神社 嘉瀬端山崎一一二ノ一

祭神は倉稻魂命です。

明治九年（一八七六）小栗崎村が嘉瀬村に合併する以前の小栗崎村産土神を祭る稻荷宮で、勧請年月不詳です。安政二年の「神社微細帳」によれば、寛永一〇年（一六三三）再建とあり、宝永元年（一七〇四）の「杜堂境内記」に延宝七年（一六七九）建立とあります。明治六年（一八七三）、嘉瀬村八幡宮に合祭されていますが、同八年（一八七五）復社しています。

嘉瀬磯崎神社 嘉瀬雲雀野二〇二

祭神は石神です。

由緒は不詳です。

嘉瀬保食神社（通称、馬頭観音） 嘉瀬端山崎二七九

祭神 大山祇神、観世音菩薩です。

由緒 不詳です。

嘉瀬駅の東方約一・九kmに、小田川左岸に面した標高六〇～一〇〇mの丘があり、ここは中世末頃とされる加勢（嘉瀬）城跡と伝承されています。地元の有志（「ふるさとのかたりべ」会員有志）の踏査によると、本丸跡は標高一〇〇m、東西幅二四・七m、南北幅一五mの長楕円形となっていて、本丸を取り囲むように幅六・五m、深さ二mの空堀が三五・五mにわたって掘られていたと報告しています（『ふるさとのかたりべ 第一集』）。

また、清久溜池えん堤を通る国道三三九号（旧小泊道）が嘉瀬町内を北上して小田川を過ぎると、水田から3mほど高く横長の長方形をした小高い地形（標高二・九m）が見られます。この小高い土地に嘉瀬館（地元では館ツコと言っています）があります。館跡は北西方向に長軸をもつひし形をしており、北東方向の短軸近くに軸と平行に空堀があり、また、東端にも空堀が見られます。前者西側空堀の長さは七〇m、堀の上部幅は六・五m、九m位、深さは一・六〇・八mです。館主・築城時期等是不明です。旧小泊道の西側には八幡宮の社地があり、館と似たような地形を示していて、地元では道路のほぼ東側の館を東館（嘉瀬館）、八幡宮のある小高い土地を西館と呼んでいます。このような小高い地形は嘉瀬集落につながっていた段丘が小田川の侵食によって分断されてできたものと考えられます。

嘉瀬には、青森県無形文化財（技芸）に指定されている「嘉瀬の奴踊」があります。この踊りは新田開発にあたっていた不遇の主人を慰めるため忠僕が踊ったのが始まりとされており、歌詞の一つに「嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて、木の葉コ沈む」のようにうたわれるところがあり、誠実なものが恵まれず、狡猾な者が世にはびこる世相を正そうとする痛烈な風刺を込めたものとなっています。いま、嘉瀬の奴踊は全国的に有名となっていますが、これには不世出と讃えられた「民謡の神様、嘉瀬の桃」こと黒川桃太郎の貢献が大きいとされています。

中柏木（なかかしわぎ）

中柏木村は正保二年（一六四五）の「郷帳」に、村高四石余とでています。貞享四年（一六八七）の「検地水帳」では一一〇石余となっており、四〇年余でかなり開拓増反が進みました。この間の開拓は沢水による掛かり水に頼っていましたが、水量は少なく冷水のため稲作は低収量で、自給自足もままならない生活基盤の弱い立地条件のもとで行われたものでした。貞享三年（一六八六）には家数一六戸・人数八六人・馬二匹となっており、戸数の割りに馬が多いのは中柏木が下ノ切通（しものきりどおり）に位置していて、農業のほかに荷駄（にだ）運搬による運送業務によって生計を立てていた家が多くあったと考えられています。実際当時中柏木の西方二ノ沢溜池周辺には原野が広がっていて、馬の飼料供給に適した環境であったと言われています。

明治二年（一八八九）、町村制の施行までは独立村として存在していましたが、明治二年嘉瀬村の大字になり、昭和三〇年の合併により、中柏木村は金木町（大正九年に町制施行）へ合併し、金木町の大字となり、平成の合併で五所川原市となって大字はなくなりました。

中柏木の東は梵珠山地を境として青森市奥内（おくない）と接し、西は旧十川と、南は五所川原地区の毘沙門と、北は金木地区の嘉瀬と接しています。中柏木という地名の由来は、当時この地域は柏の木が群生する地帯で、柏木と名のつく集落は、旧喜良市村の柏木、飯詰と中柏木の中間にあった柏木という集落（柏木と名のつく集落の南端で現

在は消滅して所在地不明です」の三つがあり、それら柏木と名のつく集落の真中に位置するので中柏木としたと言われています（『金木のかたりべ第一六集』）。

字名には不動野ふどうのと鎧石よろいしの二つがあります。不動は身体中最も注意すべき部分であるとされることから、不動野は山間の低地で耕作居住できる大切な場所を表わしているのだろうと言われています。鎧石の鎧は古代の課役で土木工事に使われた人夫の事です。鎧田とか鎧堤とかは人夫を出し合って造った田であり、堤であると言います。石は石神信仰による神社のあるところから生まれたと言いますが、鎧石の石については不明です（『ふるさとのかたりべ第九集』）。

中柏木集落北端の東に南北の長さ約四〇〇m、東西幅約三〇〇m、最高所標高五〇mの楕円形をした小高い丘があり、中世の中柏木館と伝承される館跡となっています。周囲に水堀跡、空堀跡が見られます。その館跡の中に中柏木の産土神を祭る中柏木磯崎神社いそざき（鎧石一四六）があります。文政年間の勧請と伝えられています（『北津輕郡神社誌』）。祭神は大己貴命おおぬむぢのみこと（大国主命）、少名彦命すくなひこのみことです。明治六年（一八七三）小田川村（現喜良市）立野神社へ合祭、同八年複社しています。また、集落南端の東側にある標高四〇mの小高い丘には七面大天神社が建立されています。

遺跡には不動野にある縄文時代後期の三ノ沢溜池遺跡、縄文時代後期・晩期の鎧石遺跡、縄文時代と平安時代の鎧石（2）遺跡などがあります。

中柏木は小溜池が多いという特徴があります。集落の東側山地か

ら一〇本の沢が流れており、それらの沢には一―三つの溜池が造られ、用水として利用しています。現在の中柏木は稲作と畑作の農業地域で、低地では稲作、台地ではリンゴ栽培が行われています。



図144 中柏木 下ノ切通沿いの老松

第三節 喜良市地区の地名

天文年間（一五三二～五四）の「津軽郡中名字」（『青森県史中世3』）に奥法郡山辺のうちとして「忌来市^{きらいち}」、「小田川」がでてきます。両村は下ノ切通に位置し、古くから通行の要衝でした。

忌来市はその後、正保二年（一六四五）喜良市という名称になり（『津軽郡之絵図』）、小田川は正保二年（一六四五）に小田河の字が使われましたが、正保二年以後は小田川の名称になっています。また、喜良市村を通る下ノ切通から西にはずれた所に野崎村がありました。

喜良市村は正保二年の「郷帳」に二五六石余、小田川村一六石、貞享四年の「検地水帳」では喜良市村四一四石余、小田川村四〇二石余、野崎村四六四石余とでています。小田川村は現在の喜良市集落南側小田川の右岸に面した区域（現通称町名川端町、下町、柏木町のあたり）に、野崎村は喜良市集落の北西部（現通称町名野崎のあたり）にありました。野崎村は喜良市北西に突き出た崎となっており、その崎は標高約二〇mの平坦地で野原となっていたことから呼ばれた地名と考えられます。

明治九年（一八七六）村落の統廃合により、これまでの喜良市村、小田川村、野崎村が合併した喜良市村が成立しました。

喜良市（きらいち）

忌来市の由来について伝承によると、昔小田川上流湯の沢に貴人（あるいは武将）が住み、土地の人が近寄ることを嫌ったことから、人がくるのを忌むという意味で忌来市と呼ばれたと伝えられています（『金木郷土史』）。

喜良市の語源については、「①ヒラ（坂）の転じたもので「傾斜地」をいうか。②キ（割）・ラ（接尾語）で割れ目・刻み目・谷間をいうか。いち（一、市）は位置と考えた方がよいようである。現在の喜良市は村が山麓が両側にあり、最中に田圃があり②がふさわしい」（語源からみた津軽郡中名字）としています。

ほかに、喜良市は「霧合地^{きらいち}」つまり霧が立ち込める所です。また、キラは雲母の意味で喜良市は「雲母石^{きらいし}」で雲母のあるところであったかもしれないという説もあります（『ふるさとのかたりべ第九集』）。

正保二年（一六四五）の「郷帳」では「喜良市」となっており、「忌来市」は不吉だということで改められたといわれています。

小田川は、「ヲ（小）、タ（田で狭い耕田）、ヲタはウタ、ウダが転じたもので「湿地」をいうのではないかと思われます。したがって、小田川村は小さい谷間の川に沿うてできた村である」（語源からみた津軽郡中名字）とする説があります。

喜良市の東方は梵珠山地で青森市（奥内）と境し、南は嘉瀬、北は金木、西は国道三三九号の東側で金木、嘉瀬と接しています。

『青森県字小名調』（明治一七・一八八四）による喜良市の字名には千苅、坂本、相野山、富田、蔵助平（以上喜良市）、鹿留、桔梗野、弓矢形、芦ヶ沢（以上小田川）、中富田、新千苅、新富田（以上野崎）があり、これに現在は小田川山、喜良市山が加わっています。これらのうち、いくつかの語源を紹介します（『ふるさとのかたりべ 第九集』）。

弓矢形 字義のとおり海（湖）岸が弓形になっていて、その形からふくらんだ形と思われます。

桔梗野 キキョウの古語はケツコウ、キッカウです。「桔」は「はねあげる」、「梗（こう）」は「梗直＝まっすぐ」です。桔梗野は桔梗の花を伏せた地形をした野です。用水に不自由し開田できなかった未開墾地の地名ではないかといえます。

相野山 「アイノ」はアイ（村境）の小高い原野の意味です。ほかに、アイノノカゼ（アユノカゼ）という日本海沿岸に吹く強い北風という意味から「北風が吹きつける山」とも考えられます。

相野山については、現地の状況から見ると前者の解釈が合っていると思われます。

喜良市地区の通称町内名をあげると、北から更生部落、東岩見町、西岩見町（以上地番坂本）、野崎、南本町（以上中富田）、林町、北本町、喜良市上、下派立、下柏木、双葉町（以上千苅）、上柏木（桔梗野）、下町、喜良市川端町（以上弓矢形）となっており、更生部落、東岩見町、西岩見町は金木川右岸の台地にあり、喜良市中心街から約1kmの位置にあります。

喜良市地区の岩見町から北東約1kmのところに更生という地名があります（集落名は通称更生部落といっています）。

この集落は昭和八年（一九三三）、青森県が、当時農業基盤が不安定なこれまでの農業経営および農村制度の欠陥を是正し、新たな土地を求めて協同組織によって技術、経済両面の実績を上げる理想的農村形態の実現を目指す画期的な農業のモデル事業を考えました。具体的には窓の大きな新しい住宅を造り水田五反（五〇a）、畑二町五反（二・五ha）、宅地二反（二〇a）を一戸に与えて入植させ、新しい村をつくるというものでした。いくつかの候補地の中から喜良市の原野が開墾適地として選ばれ、現地調査が行われました。

昭和九年（一九三四）、農業に期待をかけた四〇戸（二八五人）が「六畳・八畳の畳の間と台所、馬屋、作業場をもった総ヒバ、窓の大きい明るい」住宅の完成を契機に入植しました。

土づくりの第一歩は開墾作業で、まったくの原野を刈り払うため、当時日本に数台という六〇馬力のトラクターで荒おこしをし、その後はトガ、マトガの農耕具を使った人力による手作業で、一家総出の仕事でした。それでも自分の土地だとする自覚と収穫に夢を託して働き続けました。

その後産業組合（昭和二年・一九四七、喜良市農協に合併）を組織し、共同作業場や倉庫ができ、神社も建立しました。しかし、開墾早々の土地は思うような収穫を上げられず、数年間は自給自足の生活をします。

昭和一四年（一九三九）ころ、畑作の基幹となっている葉たばこ

栽培に取り組みましたが思うようにいかず、じゃがいも、西瓜、菜種が主産物でじゃがいもは予想に反して大豊作となり、年一万俵の出荷ができるようになり、「いも部落」とよばれたりしました。その後は、じゃがいも、大豆、菜種、西瓜、大根、小豆、南瓜、白菜、小麦などあらゆる野菜の作付けをするようになりました。そのおかげで、終戦当時の食べ物のないなかでも更生部落にだけは野菜が豊富で、よそから買い入れに來たといっています。

終戦を契機に部落集会所と共同作業所などを売却し、借入金の手作農資金の返済にあて完済しました。昭和四〇年（一九六五）頃には、県の計画どおり、農業経営は軌道に乗ることができました。これまでの入植者の心の支えになったのが、小河正儀知事の掲額「百萬一心自力更生」であったといっています。入植以來八〇年、三代が引き継いでいます（『金木だより 第二四五号』）。

小田川支流、湯の沢は地学的にも歴史的にも地元には広く知られた所です。喜良市の立野神社西側を通って小田川ダムへ向かう道路を約二・七km東（上流）へ進むと、小田川支流湯の沢へ向かうふろさと林道湯の沢線が分岐します。その道を上流へ約一km進んだところに湯の沢冷泉と湯の沢地藏堂があります。

地藏堂の裏には硫黄華が咲く湯の沢が流れ、沢の一带は硫黄の匂いが漂っています。すでに冷泉となっていますが、藤の滝をはじめ小田川ダム周辺に見られる玄武岩溶岩活動の名残と考えられます。

飯詰村出身で健康が優れなかった奥谷良助という寺大工が湯の沢冷泉に入浴してみたところ、非常に効能があったといわれています。

そこで他の病人にすすめたところ全快する人があり、付近の村々で評判になりました。良助は最後までここにどまり、明治一二〜三年（一八七九〜八〇）頃亡くなったらしいといわれています。

その後、西村平吉（昭和一九年・一九四四没）が客舎二軒をもつて沸かし湯を経営し賑わっていましたが、不便さからさびれ、昭和二四年（一九四九）客舎も取り壊したといわれています。

湯の沢地藏堂には地藏尊と五輪塔が祭られています。伝説によると、昔いわれのある貴人（あるいは武将）が再起を図るため、この湯の沢に居を構えたもので、地藏堂から少し離れたところに「ソバ畑」と言われている所も残っています。この地藏堂には五輪塔（貴人の墓だともいわれています）があります。昔、土地の者が山菜取りに湯の沢付近に近寄ると、墨染の衣をまとった屈強の大男が現れ「ここは汝ら俗人の來るところではない、ここは高貴な方が住んでいるところだからとっとと帰れ」と、かたわらの立木を引き抜いて振り回しながら追い返したと伝えられています（『金木郷土史』）。

この地に残された地藏尊は往年の高貴な方の御神体であり、五輪塔はその墓石と伝えられています。数々の伝説を秘めた地に滾滾（こんこん）と冷泉の湧く湯の沢に眠る高貴な方とは何者であるか、まったく分かっていません。

喜良市の神社は次のとおりです。

立野神社 喜良市桔梗野

祭神は風害を守る神 科長津彦命 科長津姫命です。

由緒は不明です。

小田川村の開村の際に建立され、寛文一二年（一六七二）再建といえます。

貞享四年（一六八七）の「検地水帳」に「観音堂地 堂建有之」とあります。安政二年の「神社微細帳」では棟札に飛竜宮、建立年月不詳、寛文一二年（一六七二）に再建とあります。観音堂は後に飛竜宮と変更したものと思われます。明治初年に立野神社に改称したものと考えられています。

境内神社二社 稲荷神社の祭神は倉稲魂命で、由緒不明です。

天満宮の祭神は菅原道真で、由緒不明です。

熊野宮 喜良市千苅

祭神は伊邪那岐命^{いざながみのみこと} 伊邪那美命^{いざなみのみこと} 事解男命^{すくはみのみこと} 素盞鳴命^{すさののみのみこと} 倉稲魂命^{くらいのみこと}
大日貴命^{おおひのみのみこと} 少名彦命^{すくなひのみのみこと} 水波女命^{みずはのみのみこと}です。

由緒は不明です。

宝永元年の「社堂境内記」（『古文書による津軽の神社縁起』）に延宝三年在建立とあります。

また、安政二年の「神社微細帳」によれば、勧請年代として、喜良市村草創の際、産神として建立しました。天正一二年再建と言い伝えられ、正徳四年（一七一四）・延享元年（一七四四）・安政二年（一八五五）の棟札があったので、たびたび再建されたものと思われる。

川上神社 喜良市千苅（通称上派立）

祭神、由緒とも不明ですが、上派立・下派立地区開拓の万治（一六五八―六〇）・寛文（一六六一―七二）頃の勧請ではないかとさ

れています。

喜良市稲荷神社 喜良市中富田（通称野崎）

祭神、由緒とも不明ですが、熊野宮に隣接し、古くは野崎の棟方長一郎宅の裏に祭られてあったものです。

大山祇神社 喜良市坂本（通称西岩見町）

由緒、勧請年代は不明ですが、喜良市山など山林で働く人々が多かったため、大山祇神社の名称となりました。山の神の本地仏は薬師様ですが、神仏分離によって神社になりました。

昭和神社 喜良市坂本（通称更生部落）

祭神は山の神です。

山神宮 喜良市千苅（通称双葉町）

祭神は山の神です。

喜良市には次の寺院があります。

喜良市山小林寺 喜良市富田六

宗教法人法に基づき昭和三九年（一九六四）、浄土宗から曹洞宗に改宗し、宗教法人として認証されています。もともと飯詰大泉寺末庵として浄土宗に属していましたが、大正初期集落戸数二七〇戸の八二％が曹洞宗で寺の教化伝導上や住民の願望から改宗となったものです。「享和三年寺社領分限帳」に享保二年七月創建喜良市村庵の名がみえており、古い庵寺と思われます。

国営小田川農業水利事業は、関係する地域四〇一一haの水田用水を確保し、用排水の分離、乾田化、土地基盤整備など農業近代化の基礎づくりのための事業で、小田川上流にダム（堤高三一m、堤長

二〇三m、総貯水量九七〇万³m、昭和五年・一九七八完成）、五所川原市尻無集落と、蒔田集落に揚水機場、頭首工五カ所、幹線用水路（のべ二四km）が造られました。事業が完成したことにより生産性を高め、農業経営の安定、効率化が図られました。

喜良市にみられる滝には、藤の滝、鹿の子滝、七ツ滝があります。

藤の滝は喜良市集落から小田川上流約七km（小田川ダムえん堤から約五〇〇m下流）のところにあります。雄滝と雌滝と呼ばれる二段の滝となっており、雄滝の高さは約三〇m、約二〇m下流に雌滝が落下していて、その落差は、一三mほどです。雌滝は道路から見ることはできないので、二段からできていることはあまり知られていないようです。小田川ダムえん堤から藤の滝周辺には玄武岩溶岩が分布しています。硬い玄武岩溶岩と、周りの凝灰岩や泥岩のやわらかい地層との、侵食の違いからできた滝です。

鹿の子滝は喜良市集落から金木川の支流高橋沢の上流約二・八km、鹿の子溜池えん堤から上流約一kmにあります。滝の落差は約一二mです。V字谷になっていて足場がよくないのですが、谷沿い側壁を



図145 藤の滝（雌滝）

通る道路から見るができます。

金木川支流母沢が金木川に合流するところに相野橋があります。ここから上流約五kmに「母沢なつかしの溪流」砂防公園が整備されていて、七ツ滝への散策路があります。滝の落差は数m程度です。

砂防公園への途中に樹齢約八〇〇年、樹高二七m、目通六・六m、台木の高さ三mばかりのところから一二本の股枝がそそりたつ、「十二本ヤス」とよばれるヒバの大きな木があります。

遺跡には、縄文時代中期・晩期の岩見町遺跡 縄文時代晩期の千苅（一）遺跡、平安時代の坂本（一）・坂本（二）遺跡があります。

コラム 「派立（はだち）」

新田開発を示す津軽地方の特異な語に派立があります。派とも書きます。現在でも派立・派と記す地名が残っています。

『地名用語語源辞典』に「はだち（派、羽立、派立、派地）近世、津軽藩、久保田藩などにおける新開墾地の称。動詞ハダツ（始める。着手する）の連用形」と見えています。『日本国語大辞典』に「はだつ 始める。着手する」とあるのが語源です。

津軽の史書はこの派立についてどのように記述しているか見てみます。

明治九年（一八七六）に成った『新撰陸奥国誌』には「当郡派をハタチと訓る村名多し。ハタチの名義詳ならず。按に俗語事を初むることをハタツと云り。村名のハタチも創ることにて新村及新墾せし処を云にや」とみえ、派立を取り上げて解説しています。

また、明治一八年（一八八五）に成った『津軽興業誌』に「派立とは新村を建てる事を云」とあるのが派立についての早い見解です。『津軽興業誌』の著者藤田貞元は弘前藩士で、明治政府に本書を提出しています。派立に注をつけているところを見ると、派立が独特の語で注を必要としていたことを暗に示しています。

派立の文字が見える資料を具体的に見ていきます。

- ① 金山之内戸沢村之派之事（『青森県史 資料編近世1』）
- ② 寛永の頃広田村派候節、七ツ館の古名を取り、広田となる（『平山日記』）

- ③ 万五郎屋敷村立の節、万五郎と申す仁派立頭につき、名と成る（『平山日記』）

④ 五所川原の義、前々より小知行派立に御座候えども、用水これなく段々田方捨り申し候をその後原子助太夫取り立て候えども、大分の普請ゆえはかどり兼ね申し候故、竹森弥太夫へ預け置き助太夫と申し合せ小知行派はい止め御蔵派立に取り立て申し候（『津軽信政公事績』）

- ⑤ 十九日ノ朝小くま梅田村派へ参り候（『永禄日記』）

- ⑥ 杉派（『広田飯詰組絵図』）

以上の①～⑥の派について、意味・使い方を説明します。

①は寛永三年（一六二六）四月六日、藩主の津軽信枚が、伊藤六右衛門へ金山の内戸沢村の開墾地二〇〇石を宛行う内容の「金山之内戸沢村之派之事」と題する古文書です。

家中在町のいずれを問わず、希望次第に村に住み着かせ開発するようにとの内容となっています。

②は広田村開発のとき七ツ館村の古名をとって広田としたとの意味です。

ハダチは最初①・②のように開発を意味する言葉でしたが、次第に意味が多様になっていきました。

③は万五郎屋敷村の村名をつけるにあたり派立頭の名をとっています。派立頭は新田開発者の頭の意味で、役職名として使われました。

④は弘前藩において新田開発の種類を示す用語として用いられた例です。近世初頭から新田開発が進められた弘前藩では、小知行と呼

ばれた下級藩士が開発した小知行派、藩の蔵入地（藩の直轄地）を耕作する御蔵百姓が開発する御蔵派立の二種類がありました。

⑤は枝村という意味で使われています。

⑥は大字神山地内に通称杉派立と呼ばれているところがあります。親村の神山中心地より南1kmのところにあり、杉漆新田と称し寛文七年（一六六七）の取立てといえます（『長橋村誌』）。杉、漆等を植えて開村した新田集落と思われます。「広田飯詰組絵図」には杉派立と記載されており、村名として使われています。

五所川原市内の派立として使われている地名は次のとおりです。大字神山字野岸・山越・牧原には通称杉派立があります。これは町内会名としても使われています。

大字前田野目地内、大字高野寄りの字川崎・桜ヶ峰・村中の地域を表す通称として派立があります。

大字飯詰字福泉には通称として南新派立（南新）・北新派立（北新）・南下派立（南下）・中下派立（中下）、下岩崎字戸草元に北下派立（北下）があります。（ ）内は現在の町内会名です。



図146 杉派立集会所

金木町喜良市千刈には、上派立、千刈と新千刈にまたがるところに下派立（丹生川上神社付近）の、二つの通称名があり、町内会名ともなっています。

金木町嘉瀬端山崎と雲雀野にまたがるところに、上派立、中派立、下派立の三つの通称名があり、町内会名ともなっています。

相内には相内第一町内会の中に派立と称するところがあり、近くに派立橋があります。

現在の地名、集落名として残っているところは、開発地から固有名詞に発達したところと思われます。親村の地先、すなわち村端を開発した集落ができていきます。親村、支村（枝村）の関係から、開発進捗の方向を示すなど新田集落の発達を示す資料ともなります。

なお、姓としては派谷（はたちや）があります。



図147 相内川に架かる派立橋